

第22回研修会講演①

IRcuresILLからrliasionプロジェクトへ：
リポジトリと図書館活動の接点を探して

● Barrel について

小樽商科大学のリポジトリは、小樽商科大学学術成果コレクション、愛称はBarrelといいます。Barrelは大きな樽という意味です。小樽の「樽」は小さな樽ですが、小さな樽ではなく大きな樽いっぱい小樽商科大学の研究成果を保存し公開していきたいという願いをこめて名づけました。

小樽商科大学の特徴として、図書館を利用する教員と図書館職員との距離が近いということがあります。また、文系という分野の特性からか、雑誌をそのままスキャンしてリポジトリに掲載してもよいと許されることが多く、リポジトリに登録している学術雑誌論文のうち95%は出版者版となっています。また、日本語の文献が87%と多いことも特徴のひとつです。

文献収集にあたり、教員とのマンツーマン体制をとりました。教員一人につき、担当者が一人つき、出版者への問合せ作業、登録作業、教員との連絡調整などリポジトリにかかわる業務を担当者制で分担してきました。リポジトリは図書館の3係5名からなるワーキンググループが中心となって運営していますが、メンバーはもともと目録、システム、カウンター業務、雑誌、ILLなどの業務をそれぞれ担当しており、リポジトリ業務を片手でやるのではなく、全員の仕事の中に根付いていけるようにしたいと考えました。そういったなかで、たとえば、リポジトリとILLは、文献供給サービスという意味では同じであり、従来の業務とリポジトリの業務を接近させ、効率的に運用することはできないだろうか、と考えるようになりIRcuresILLプロジェクトがうまれました。

● IRcuresILL プロジェクトについて

IRcuresILLプロジェクトは、国立情報学研究所のCSI事業領域2として採択され平成20年度から21年度にかけて小樽商科大学と北海道大学が中心となって活動したプロジェクトです。リポジトリを充実させることで、少しでもILL業務の負荷を減少できないか、逆にILLでどんな文献が求められているか、という生の情報をリポジトリのコンテンツ構築のペースメーカーにしていくことは可能なのかということを考えました。2年間の委託事業期間中、DRF参加86機関のILL担当者、リポジトリ担当者へのアンケート実施、NACIS-ILL3年分のデータ分析・動向調査、有志の図書館職員のチームI'IIの結成、平成21年のオープンアクセスウィークに合わせたポスター・チラシ作

小樽商科大学学術情報課情報普及係 南 絵里子

成、平成20年度NACIS-ILLデータ分析結果リクエスト数上位論文の筆頭著者へのアンケートといった活動を行ってきました。どのようにしてILLで依頼されている文献複写をリポジトリ登録へ反映したらよいか、その最適な手法は確立には至りませんでした。オープンアクセスは機関リポジトリ担当者だけが背負っていくのではなく、図書館界全体の課題であると認識を新たにしました。そして、ILLなどの伝統的な図書館活動とリポジトリとの接点は他にもあるはずと考え、DRFの機関紙発行などの活動に、課題意識を継承することとし、rliasionプロジェクトに活動をシフトしていきました。

● rliasion プロジェクトについて

このプロジェクトは、平成22年4月からの取り組みで、組織的な意識喚起活動による教員との連携強化、リポジトリへの文献登録の義務化方針を含む制度構築という2つのアプローチにより、リポジトリのコンテンツ増加と図書館の研究支援機能強化を目指しています。インターネット時代に希薄化していく教員との関係回復、維持を最大の目的としています。小樽商科大学、帯広畜産大学、北海道大学を中心として活動を行っており、全国のメンバーとメーリングリストで情報共有を行っています。

組織的な意識喚起活動として、小樽商科大学は平成22年7月から専属司書制度を開始しました。これまでのマンツーマン体制を強化し、教員一人につき二人の図書館職員が担当として、リポジトリをはじめとして、その教員に対する図書館サービス全体の質問、要望などを受け付ける窓口になるというのですが、二人体制にした理由は図書館側の人事異動で、それまでに築いてきた教員との関係が失われてしまうことを防ぐためです。二人の担当者が中心として、全教員を対象とした年1回程度の定期的な研究室訪問に取り組んでいます。

小樽商科大学図書館では、今まで図書館の中で仕事をしてきた図書館職員がリポジトリという仕事を通じて、教員と対話し、教員の研究内容について理解しようとしたり、図書館についても知ってもらおう働きかけをすることで、お互いの距離が少し縮まったように思います。小樽商科大学では、これからも、教員の声を取り入れ、リポジトリをきっかけとして、大学の中で存在感がある図書館を目指し、図書館サービス全体を向上させていきたいと思っています。